

## &lt;論 説&gt;

## エクスプロイテーション（搾取）概念と功利主義批判

山口 拓 美

## 目 次

はじめに

1 ベンサムと相互エクスプロイテーション

2 資本の文明化作用とエクスプロイテーション

おわりに

## はじめに

Exploitation（以下、エクスプロイテーションと表記する）という語は、マルクスが好んで用い続けた語の一つである。マルクスは最も初期の頃からこの語を用いているが、その際彼は、しばしばこの語を功利主義的な思想や行為と関連付けて用いている。しかし、日本語にはエクスプロイテーションという語に対応する一個同一の訳語が存在しないという事情が背景となり、わが国では、この語と功利主義批判との関連があまり注目されてこなかったと思われる。本稿は、この関連を究明しようとするものである。

## 1 ベンサムと相互エクスプロイテーション

『資本論』以前のマルクスの諸著作の中で、エクスプロイテーションという語が最も多く使われているのは、『ドイツ・イデオロギー』の中の「聖マックス」である。また、ベンサムと功利主義への言及が、最も集中的に現われるのも「聖マックス」である。しかも、これらの語は、しばしば同一の文章の中で用いられている。例えば次のようである。

「この相互エクスプロイテーションの理論は、ベンサムがうんざりするほど詳論したものだ<sup>1)</sup>」

「功利説にとっては、これらの大きな諸関係にたいする個々人の地位、個々の個人による目前の世界の私的エクスプロイテーション以外には、いかなる思弁の分野も残っていなかった。この分野についてベンサムとその学派は長い道徳的省察をやった。<sup>2)</sup>」

ここで、日本語版の訳者は、エクスプロイテーションを「利用」と訳しているが、訳者が「利

用」と訳しているのはエクスプロイテーションだけでない。邦訳者はベヌツツング (Benutzung) というドイツ語についても、これを利用と訳している。それでは、エクスプロイテーションとベヌツツングとは、ここでまったく同一の意味で使用されているのであろうか。次の文は、マルクスがこれらの二語を、区別して用いていると考えられることを示している。

「この功利関係は一つのまったく明確な意味、すなわち、私は他人に損害を与えることによって自分を利する (人間による人間のエクスプロイテーション [exploitation de l'homme par l'homme]) という意味をもっている。<sup>3)</sup>」

ここから、マルクスがエクスプロイテーションというフランス語からの借用語に、「他人に損害を与える」という意味を込めていたことが読み取れる。したがって、エクスプロイテーションは、単なる「利用」であるベヌツツングとは異なり、利用対象に何らかの害を与えるところの「利用」であると考えられる。日本語版の訳者は、上記引用文中のエクスプロイテーションの訳語として「搾取」という日本語を用いているが、これは、エクスプロイテーションという語のこのようなニュアンスに対応したものであろう。しかし、エクスプロイテーションは「利用」という意味を強く持つから、邦訳者は「搾取」という訳語をほとんど使用していない。代わりに、訳者はしばしば「利用 [搾取]」という訳語を用いている。この訳語は、音読に不向きであり、日本語としては未完成であるといわざるをえないが、エクスプロイテーションという語の意味については、これをよく伝えているといえる。エクスプロイテーションとは「利用 [搾取]」ということであり、マルクスによれば、ベンサムは「相互エクスプロイテーションの理論」の大家なのである。

マルクスは、エルヴェシウス、ドルバック、ベンサム、ミルらの功利主義的思想をブルジョアジーの思想として位置付けている。

「エルヴェシウスやドルバックにおいて現われているような実証的内容を奪われた普遍性は、ベンサムやミルのもとではじめて見いだされるような、内容にみちた全体性とは本質的に異なっている。前者は、闘争しているまだ未発展なブルジョアジーに対応しており、後者は、支配している発展したブルジョアジーに対応している。<sup>4)</sup>」

そして、ブルジョアジーとエクスプロイテーションとは次のような対応関係を持つとされる。

「ブルジョアにとってはただ一つの関係、すなわちエクスプロイテーション関係だけがそれ自身のゆえに重要性をもつ。<sup>5)</sup>」

そこで、功利主義的思想家の任務は次のようなことを遂行することであるとマルクスは言う。

「ブルジョア的实践に照応する意識，すなわち，互いに相手をエクスプロイテーションしあうのがすべての個人相互の普遍的関係だという意識を理論的に布告すること<sup>6)</sup>」

マルクスにとってベンサムは，このような相互エクスプロイテーション理論の代表者である。他人をエクスプロイトすることは，他人に損害を与えて自分を利することであるが，このようなエクスプロイテーションは，ベンサムの目に映っている世界においては，一方的なものではなくて相互的である。この相互性によって，エクスプロイテーションは公益をもたらす。

「分業においては個々人の私的活動は公益的となる。ベンサムの公益性は，ひっきょう，一般に競争において実現される公益性と同じものに帰着する。<sup>7)</sup>」

ベンサムに代表される相互エクスプロイテーション理論の経済的土台については，マルクスは次のように述べている。

「人間相互の多様な諸関係をすべて有用性という一つの関係に解消するという，一見ばかげたやり方，この一見形而上学的な抽象が生じてくるもとは，近代市民社会の内部ではすべての関係が，實際上，抽象的な貨幣関係および商売関係という一つの関係のもとに包摂されているという事実なのである。<sup>8)</sup>」

以上をまとめれば，次のようになるであろう。

ベンサムに代表される功利主義的思想はブルジョアジーの思想であるが，その内容は人間相互の関係を相互エクスプロイテーション関係と捉えるものであり，この思想の経済的土台は近代社会を包摂している商品貨幣関係である。

『ドイツ・イデオロギー』におけるベンサムについてのマルクスのこのような認識は、『資本論』第1巻第2篇の「貨幣の資本への転化」に記された有名な次の箇所と見事に一致するものである。

「労働力の売買がその枠内で行なわれる流通または商品交換の部面は，実際，天賦人權の真の楽園であった。ここで支配しているのは，自由，平等，所有，およびベンサムだけである。……ベンサム！というのには，両当事者のどちらにとっても，問題なのは自分のことだけだからである。彼らを結びつけて一つの関係のなかに置く唯一の力は，彼らの自己利益，彼らの特別利得，彼らの私益という力だけである。そして，このようにだれもが自分自身のことだけを考えて，だれもが他人のこ

とは考えないからこそ、すべての人が、事物の予定調和に従って、またはまったく抜け目のない摂理のおかげで、彼らの相互の利得、共同の利益、全体の利益という事業をなしとげるだけである。<sup>9)</sup>」

この文の中には、エクスプロイテーションという語は出てこない。しかし、ここで言われている内容は、上で見た相互エクスプロイテーションと同一のものである。『ドイツ・イデオロギー』のベンサム論を前提すれば、この箇所でもマルクスは、「ベンサム」という語によってエクスプロイテーションの相互性を示していたと捉えることができる。そして「ベンサム」という語をこのように捉えると、『資本論』第1巻第2篇の末尾に置かれたこの文と、これに続く第3篇との繋がりが極めて明瞭なものとなる。というのは、第3篇では、エクスプロイテーションの一方性が論じられているからである。

商品交換の部面では、ベンサムらが主張するようなエクスプロイテーションの相互性がいえるとしても、生産の部面に目を転ずれば、そこにはエクスプロイテーションの異なった側面が見出される。それは資本家による労働者の一方的なエクスプロイテーションである。労働力商品の有用性すなわち使用価値は、資本家によって一方的に使用され、消費され、消耗する。『資本論』第1巻第3篇で、マルクスはエクスプロイテーションのこの非相互性を描写するとともに、エクスプロイテーションの度合を計測する指標を提出したのであった。そしてさらに第7篇の再生産論では、エクスプロイテーションの階級的性格が明らかにされ、この階級的エクスプロイテーションという点で、資本主義的エクスプロイテーションが奴隷制的な性格を持つことが指摘されている。

マルクスは、ベンサムの功利主義を、私益の追求が公益をもたらす予定調和の思想として捉えているが、この思想の批判においてエクスプロイテーションの概念は、商品交換の部面での相互性という外観と、生産の部面での階級的敵対という真相とを連結し、これによって予定調和を破壊するという役割を果たしているといえる。

ところで、マルクスによるベンサム評価は、赤間道夫氏の一連の論考によって包括的かつ詳細に検討されており、本稿が上で取り上げた箇所も、赤間氏の諸論考がすでに論じ尽くしているものである<sup>10)</sup>。しかし、赤間氏の諸論考には、一つだけ欠けているものがあるように思われる。それは、Exploitationに対する一個同一の訳語である。赤間氏は、『ドイツ・イデオロギー』の既成の邦訳を尊重し、Exploitationの訳語として「利用」と「搾取」の両方を用いており、とりわけwechselseitigen Exploitationについては、これを「相互利用」としている。このため、赤間氏の論考では、wechselseitigen Exploitationの別名である「ベンサム」と、『資本論』第1巻第3篇以降のExploitation der Arbeitskraftとの関連が十分に明瞭なものとはなっていないように思われる。日本語への翻訳がExploitationを「利用」と「搾取」の二つに分割してしまったため、効利主義批判と剰余価値論との関係が不明瞭になってしまったのである。

## 2 資本の文明化作用とエクスプロイテーション

マルクスは、功利主義的思想をブルジョアジーの思想と位置づけ、その思想内容を相互エクスプロイテーション論と見た。これにより、功利主義的思想とエクスプロイテーションに対するマルクスの評価は、ブルジョアジーに対する評価と同様に肯定的側面を持つことになる。「聖マックス」ではこの点が次のように記されている。

「ドルバックの理論は、ちょうどフランスで台頭しつつあったブルジョアジーにかんする歴史的に正当な哲学的幻想であって、このブルジョアジーのエクスプロイテーション欲は、まだ、古い封建的絆から解放された交通のなかでの諸個人の完全な発展をねがう気持というふうに解釈されることができた。ブルジョアジーの立場での解放、つまり競争は、たしかに一八世紀としては、諸個人にいつそう自由な発展の新しい進路をひらくべき唯一の可能な方法であった。このブルジョアの実践に照応する意識、すなわち、互いに相手をエクスプロイテーションしあうのがすべての個人相互の普遍の関係だという意識を理論的に布告することもまた、同様に一つの思いきった公然たる前進であった。それは一つの世俗化的啓蒙であって、封建制のもとにおけるエクスプロイテーションの政治的、家父長的、宗教的および心情的な飾りつけをあばくものであった。この飾りつけは、当時のエクスプロイテーション形態に照応したものであって、ことに絶対王制の著作家たちによって体系化されてもいたのである。<sup>11)</sup>」

ここでは、ブルジョアのエクスプロイテーションと功利主義的思想が、封建的エクスプロイテーションからの解放と、それによる諸個人の発展を促すものとして、社会の歴史的な発展を進めるものとして、肯定的に評価されている。これと同様の評価は『経済学批判要綱』の中にも見られる。

「資本にもとづく生産は、一方では普遍的な産業活動——すなわち剰余労働、価値を創造する労働——をつくりだすとともに、他方では、自然および人間の諸属性の全般的なエクスプロイテーションの一体系、全般的な有用性の一体系をつくりだすのである。そして科学そのものが、すべての肉体的属性および精神的属性と同様に、この体系の担い手として現われる。……このようにして、資本がはじめて、市民社会〔ブルジョアの社会〕を、そして社会の成員による自然および社会的関連それ自体の普遍的取得を、つくりだすのである。ここから資本の偉大な文明化作用が生じ、資本による一つの社会段階の生産が生じるのであって、この社会段階に比べれば、それ以前のすべての段階は、人類の局地的諸発展として、自然崇拜として現われるにすぎない。……資本は、このような自己の傾向に従って、自然の神化を乗り越えて突き進むのと同様に、もろもろの民族的な制限および偏見を乗り越え、既存の諸欲求の、一定の限界内に自足的に閉じこめられていた、伝来の

充足と、古い生活様式の再生産とを乗り越えて突き進む。資本は、これらいっさいにたいして破壊的であり、たえず革命をもたらすものであり、生産諸力の発展、諸欲求の拡大、生産の多様性、自然諸力と精神諸力のエクスプロイテーションならびに交換を妨げるような、いっさいの制限を取り払っていくものである。<sup>12)</sup>」

この文は、相対的剰余価値生産の帰結として、資本が新たな生産部門の創出に駆り立てられることを論じた部分に出てくるものであり、いうまでもなく「聖マックス」の論述よりも遥かに進んだ経済学研究の成果を背景としている。「聖マックス」では、ブルジョア的エクスプロイテーションとしての有用性の追求が人間相互の関係の中に見出されているが、ここではそれが自然と人間の諸属性全般について言われている。資本主義的生産は常に自然と人間のエクスプロイテーションを推し進めるものであり、そしてそれは人間の欲求の豊富化をもたらすのである。

とはいえ、この「資本の偉大な文明化作用」は、ここでもまた資本主義以前の発展段階にある生産様式との比較において主張されているものであり、この点で「聖マックス」と同様の見地がとられている。ブルジョア的エクスプロイテーションが肯定的に評価されるのは、それが過去のエクスプロイテーションと比較される場合でのことであり、視線が未来に向けられる場合、ブルジョア的エクスプロイテーションは否定の対象でしかない。『資本論』では、労働力のエクスプロイテーションだけでなく、土地の自然力のエクスプロイテーションも否定的なものとして捉えられている<sup>13)</sup>。

ところで、本節で取り上げた功利主義的思想に対するマルクスの肯定的評価は、松井暁氏の「マルクスと功利主義」によって、より包括的かつ体系的な仕方でも考察されている。しかし、松井氏の論考にも、やはり Exploitation に対する一個同一の訳語が必要であったように思われる。このような訳語が存在しないため、松井氏の論考では、エクスプロイテーション概念と功利主義との関係、および、労働力のエクスプロイテーションと労働力以外の存在を対象としたエクスプロイテーションとの関係が十分な仕方では明確化されていないように思われる。

松井氏は、マルクスの諸著作の既成の邦訳を尊重し、Exploitation の訳語として「利用」「開発利用」「搾取」という異なる日本語を用いている。その上で、松井氏は「搾取論」を次のように規定する。

「搾取論の課題は、資本主義社会における表面上は対等な関係に見える資本家と労働者の関係が、実質的には後者が生産した剰余価値を前者が搾取する関係であることを明らかにする点にある。<sup>14)</sup>」

ここから、松井氏が「搾取論」を「剰余価値の搾取」すなわち労働力のエクスプロイテーションに限定しているのが分かる。その上で松井氏は、「搾取論」を功利主義の一要素である厚生主義の中に位置づけ、資本主義に対するマルクスの否定的評価が示されている項目として分類して

いる。一方、『経済学批判要綱』に現われる「自然および人間の諸属性の全般的なエクスプロイテーション」については、これを「全般的な開発利用」という訳語を使用しつつ功利主義の一要素である帰結主義の中に位置づけ、資本主義に対するマルクスの肯定的評価が示されている項目として分類している。このような把握は、マルクスの功利主義批判とエクスプロイテーション概念との関係を体系的に整理している点で優れているが、前者のエクスプロイテーションを「搾取」とし、後者のエクスプロイテーションを「開発利用」としているため、両者の関連が分かりにくくなっている。特に、一方では労働者という人間のエクスプロイテーションが否定的なものとして分類されているのに、他方では「人間の諸属性」のエクスプロイテーションが肯定的なものとして分類されているが、このようなエクスプロイテーションの評価の相違が何に由来するものなのか、松井氏の論考では十分に明確な形では示されていない。また「自然の諸属性」のエクスプロイテーションが資本主義の肯定面として取り上げられている一方で、マルクスが明らかに否定的評価を下している「地力のエクスプロイテーション」は取り上げられていない。おそらく、こうした処理は、Exploitationの訳語として「搾取」や「開発利用」といった著しく異なった日本語を用いているためではないかと思われる。Exploitationに対して「エクスプロイテーション」のような一個同一の訳語を使用すれば、エクスプロイテーションが「対象を功利的に利用する」というような功利主義的な概念であること、資本主義的エクスプロイテーションが、封建主義的エクスプロイテーションと比較すれば進歩的・肯定的側面が際立つ一方で、アソシエーションと比較すれば否定の対象でしかないこと、こうしたことが自ずから明確になっていたであろうと思われる。

## おわりに

マルクスによる功利主義批判は、多くの研究者によって取り組まれてきたテーマであり、わが国にはこれに関する優れた論考が多く存在する。本稿ではその中から、赤間道夫氏と松井暁氏の論考を取り上げた。

赤間氏の論考においても松井氏の論考においても、その功利主義論の中で Exploitation の概念が用いられている。しかし、両氏の論考においては、Exploitation の概念と功利主義との関係が、十分に自覚的な仕方では、見出されていないように見える。これは、日本語の中に Exploitation に対応する一個同一の訳語が存在しないためではないかと推察される。

本稿では、Exploitation をエクスプロイテーションと表記することで、この語が示す概念と功利主義批判との関係を明示した。

注

- 1) 『マルクス=エンゲルス全集第3巻』大月書店, 1963年, 441ページ。*Marx-Engels Werke*, Bd. 3, Berlin: Dietz Verlag, 1958, S. 394. 引用に際し, 「利用」を「エクスプロイテーション」に変えた。原語がExploitationである場合, 以下においても同様の処理をしている。
- 2) 同上, 446ページ。Ebd., S. 398.
- 3) 同上, 442ページ。Ebd., S. 394.
- 4) 同上, 444ページ。Ebd., S. 397.
- 5) 同上, 442ページ。Ebd., S. 395.
- 6) 同上, 443ページ。Ebd.
- 7) 同上, 446ページ。Ebd., S. 398.
- 8) 同上, 441ページ。Ebd., S. 394.
- 9) マルクス『資本論』第一巻a(全5冊), 資本論翻訳委員会訳, 新日本出版社, 1997年, 300-301ページ。*Marx-Engels Werke*, Bd. 23, Berlin: Dietz Verlag, 1962, S. 189 f. 引用文中の「……」は, 引用者による省略部分。
- 10) 赤間道夫「マルクスのベンサム論—『自由, 平等, 所有そしてベンサム』の解剖—」愛媛大学法文学部論集経済学科編『経済学』第22号, 1989年, 35-58ページ。赤間道夫「マルクスとベンサム—文献上のかかわりで—」同上『経済学』第23号, 1990年, 47-63ページ。赤間道夫「新MEGAのベンサム評注」同上『経済学』第24号, 1991年, 29-39ページ。赤間道夫「マルクスとベンサム—『自由, 平等, 所有そしてベンサム』の解剖を通して—」『『経済学批判要綱』における歴史と論理』中村哲編, 青木書店, 2001年, 91-114ページ。赤間道夫「功利主義とマルクス」『季刊・経済理論』第41巻第4号, 37-47ページ。
- 11) 前掲『マルクス=エンゲルス全集第3巻』443ページ。*Marx-Engels Werke*, Bd. 3, a. a. O., S. 395.
- 12) マルクス『資本論草稿集②』資本論草稿集翻訳委員会訳, 大月書店, 1993年, 17-18ページ。*Marx-Engels Gesamtausgabe* (MEGA), II. Abt., Bd. 1, Tl. 2, Berlin: Dietz Verlag, 1981, S. 322. 引用文中の「……」は, 引用者による省略部分。
- 13) マルクス『資本論』第三巻b(全5冊), 資本論翻訳委員会訳, 新日本出版社, 1997年, 1424-1425ページ。*Marx-Engels Werke*, Bd. 25, Berlin: Dietz Verlag, 1964, S. 820 f.
- 14) 松井暁「マルクスと功利主義」『専修経済学論集』第43巻第2号, 16ページ。